吉野川ラムサールネットワーク
Vol. 8
2016.6.29発行

コウノトリ・ナベヅルが舞う徳島の地とは？

梅雨も半ば、晴れ間が見えると干潟のカニたちが姿を現します。一方、コウノトリを時々見かけるレンコン畑では、白い蓮の花が咲いています。このような自然の風景は見る人を癒してくれます。

北に阿讃山脈、南に剣山系の山々があり、吉野川、勝浦川、那賀川など大きな川が紀伊水道へ流れこみ、また南部の日和佐川、海部川などは太平洋へと流れ込んでいます。まさに　森、川、里、海が織りなす徳島の自然は、私たちに多くの恵みをもたらしてくれています。

吉野川や勝浦川などにある河口干潟は、シオマネキなど底生生物の棲みかとなり、渡り鳥の寄港地となっています。生きものの豊かなたんぼでは、サギなどの野鳥が餌をついばんでいる光景がみられ、冬には、ナベヅルもやってきます。

吉野川汽水域及び流域では、かつて阿波藍の産地として地域経済を支えた藍の栽培が、今も続いており、シジミ、シラスウナギの漁、スジアオノリの養殖やレンコンやサツマイモの栽培が行われています。勝浦川や那賀川などの流域においても稲作などの農業が行われています。このように昔から今に至るまで、人々は、賢明に干潟や田んぼの湿地を利用し暮らしてきており、ラムサール条約のワイズユース（賢明な利用）そのものを実践しています。

ラムサ-ル条約の基盤となる考え方として、湿地の適切な「保全・再生」には生態系に配慮した持続可能な「賢明な利用(ワイズユース)」「が不可欠です。この「ワイズユース」と「保全・再生」を進めるためには、湿地に関わる関係者の「広報・教育・参加・普及啓発」の活動が必要となります。

そこで、今回、吉野川ラムネットは、「コウノトリ・ナベヅル徳島フォーラム」の実行委員会メンバーとなりました。今回は、コウノトリやナベヅルに選ばれた徳島の地で、彼らの生息を支えるために何ができるか、また課題は何かを専門家と共に関係者及び参加者の皆さんとで、一緒に考えたいと思います。是非ご参加ください。

藤永知子

コウノトリ・ナベヅル徳島フォーラム

2016 年 7 月 2 日（土）13:30～16:30　※13:00 開場
ふれあい健康館ホール（徳島市沖浜東２丁目１６）　　参加費無料　　申し込み不要

コウノトリ・ナベヅルの生息地を見るバスツアー

鳴門市大麻町・那賀川周辺
2016 年 7 月 3 日（日）9:00～16:30　　集合：県民活動プラザ前 9:00（マリンピア）
◆主催　コウノトリ・ナベヅル徳島フォーラム実行委員会 ◆

吉野川の思い出

戸田初美

私の実家は吉野川の河口の近くで米屋を営んでいました。今は米屋と言ってもビニール袋詰めの米袋しか店頭に並んでいませんが、５０年前、私が小学生になった頃は、米屋では大きなドンゴロスの袋に入った玄米が運ばれてきて、一日中機械で精米をしていました。それでお店では、３人の若い衆を雇っていました。若い衆のお兄ちゃんたちと、眉山の花見、吉野川の潮干狩り、沖洲の海水浴と季節折々の行楽に出かけたことが、小学生の頃の楽しい思い出での一つです。

吉野川の潮干狩りは、渡しの船に乗って潮の引いた中洲まで行きました。私や母はそこで砂を掻いて貝を探しましたが、父や若い衆のお兄ちゃんたちは腰ぐらいの深さまで川の水の中に入って、足でまさぐって大きなハマグリを取っていました。小さな私には両手を広げないと持てないぐらいの大きさでした。「川の中にはすごい物があるのだなあ。」と川の中から出てくる大きな収穫物にびっくりさせられたことが記憶に残っています。川が生物を育んでいることを私に教えてくれた潮干狩りでした。

また、普段の日曜日、父だけ朝からゴルフに行ってしまった日、小さな弟たちがけんかをし始めると、母が「ほな、土手にでも行くで。」とおにぎりを作って、子ども３人を吉野川の土手に連れて行ってくれました。私はつくしやたんぽぽを摘んで、弟たちは土手で転がって遊んで、母は弟たちが転がりすぎないように見守っていました。お昼になると、土手に座って、眉山や吉野川の流れを見ながら、みんなでおにぎりを食べました。土手ではゆっくり静かに時間が流れるように思えました。四季の草花、草の中から出てくる虫、土の穴から顔を出すカニ、みんな手で触れられる自然でした。吉野川の土手は、子どもの私に自然の息吹を感じさせてくれる場所でした。

2014.春　阿波しらさぎ大橋
ウオーキングにて

土手から見た住吉干潟

～吉野川礼讃　6～

川の下流部「今切れ」の歴史　一コマ

　最近、三河，遠江を訪ねることがあって「新城」市を知った。
「長篠の合戦」で有名な長篠城の廃城後「新しい城」として、より平野部に成立した地名であった。「新薬師寺」といえばあたらしそうだが、成立は奈良西の京の「薬師寺」より新しいだけの天平期の成立である。
　「新」というイメージが最近のように思われがちだが、各々の歴史事象は「少しだけ新しいもの」に〈新〉がつく。　実は古い歴史を刻む。

　さて徳島には「今切川」がある。本来の吉野川《旧吉野川》が、現北島町高房あたりで新たに分岐して最近に流路が変わったので「今（新しく）切れた川」という。固有名詞のように見えて普通名詞の趣きもある。（浜名湖が遠州灘に流れ込むあたりにも「今切」の地名がある）
　そしてさらに徳島市にも、県立城北高校の北、春日町に、戦国時代「今切城」（堀と土塁と柵でできた砦、簡素な城）があった。ここは鮎喰川が平野部に出て流路を変転させている所。河道が新たに「今切れた」ところである。

　徳島の 16 世紀は、細川氏から三好氏が抬頭してくる時期。父の違う兄弟の争いの中、勝瑞を出て鷲敷茨ヶ岡城による細川真之（兄）を三好長治（弟）が攻めた。しかし細川旧臣の反撃にあい、形勢不利となり、この今切城を守る篠原氏を頼って来た。ところが援兵の森水軍が漆黒の闇の中、多くの水路に迷い到着が遅れた。そのために三好長治は、現今切川河口の長原の付近で討ちとられたのだった。川の下流の湿地には、多くの「今切れ」水路があったのだろう。
歴史事実は、地形によってつくられていると感じられる　一コマ　　**河野真理**

今回も跳ぶ魚「エソ」を紹介しよう。

　水面の小魚を追ってジャンプ、きれいな弧を描いて頭から水中へ、見事なジャンパーだが、食べるには身の間の骨が多い。キス釣りでは、釣り上げ中のキスを大口で横取りするため、釣り人の嫌われ者。カマボコ等の大切な資源として水揚げされている。スズキや太刀魚釣りの外道として釣れる。　持ち帰り料理しても身の間に沢山の骨が有り非常に扱いにくい。

ある日、美味しいのに食べにくいとぼやいていると、娘の幸が「骨、抜いたげる」と身の間の骨を全て取って刺身にしてくれた。少し身は崩れたものの、もちっとした食感、上品な味でとても旨い！沢山釣れても持ち帰るのは一尾、他は放流。理由は骨が約 140 本、抜くのに時間がかかるのである。三枚に下ろし皮を引き、五～六時間冷蔵すると抜きやすくなる。苦労して作った刺身は筆舌に尽くせないほど美味！

娘が編み出してくれた思い出の料理である。

他にも干して焼くとグッド！　　今年も シーズン、おいしい吉野川ごちそうさま。

翔べ美しく海の幸！　　にしのさちの父

生きものと史跡をめぐる 渭北水辺ウオーキング(3/21) 報告

この日は
中央公園(駐車場) ➔ 城山（海蝕痕） ➔ 内町小学校(西の丸の石垣の一部，御花畠跡) ➔ 水道橋 ➔ 旧道 ➔ 春日神社 ➔ 興源寺(藩主の墓所) ➔ 日枝神社 ➔ 鈴江の渡し跡＆千本杭　　吉野川を眺めて解散

風の強い日で歩き始めは体感温度はかなり低く感じたが、歩き出すと暖かくなってきた。城内とお花畑屋敷の出入り門跡を見学。助任川の水道橋を渡り昔の助任川の堤防沿いの桜並木の説明を聞く。昔の道筋を通り、こんなところから入るかと思うようなところを冒険して興源寺内へ。興源寺池では汽水域の貝を観察。日枝神社から最後の鈴江の渡し跡があった干潟へ到着。

参加者は２０名(おとな１７名、こども３名)。郷土歴史家河野真理さんの説明を聞きながら２時間のウオーキングとなった。

（報告Ｙ）

海蝕痕の説明

元助任川堤防の桜並木の解説

興源寺の池で汽水域の貝観察

助任やさき干潟であそぼう!(6/5) 報告

小雨降る中決行
雨にもかかわらず
生きもの観察を十分
楽しみました

今回は、助任やさき干潟の観察会ですよ♪

スタッフの心配をよそに、合羽を着て、傘をさした親子(大人１３人、こども１５人)が参加。
広ーい干潟には雨のためか生きもの姿はなかったが、ざるとスコップで、生きものを探した。

干潟は、水温も下がり生きものはなかなか見つからなかったがスコップで掘っていくとスナモグリ、ハゼの仲間、ソトオリガイ、ヤマトオサガニ、コメツキガニ、ヤドカリなどを見つけることができた。
（写真・報告Ｉ）

吉野川ラムサールネットワーク
事務局 藤永知子
TEL: 090-7268-9448
Email:taikazann@hotmail.com